

表1：飲食物の指標値の相違（単位：Bq/kg）

対象	発表者	根拠	放射性ヨウ素	放射性セシウム
野菜類、穀類、肉・卵・魚その他	日本（厚生労働省・原子力安全委員会）	原子力施設等の防災対策に係る指針	2000	500
	ドイツ（放射線防護協会）	ドイツ放射線防護令規定	“食物は摂取すべきでない”	1（乳児、子供、青少年） 8（成人）
牛乳・乳製品	厚生労働省	典拠なし	100（乳児） 300（一般）	200
飲料水	厚生労働省	典拠なし	100（乳児） 300（一般）	200

出典：厚生労働省医薬食品局食品安全部長（2011年3月17日）

ドイツ放射線防護協会「日本における放射線リスク最小化のための提言」（2011年3月20日）

表2：チェルノブイリ原発事故の健康影響度評価

公表機関	年	影響評価	調査方法・根拠・原典・備考	出典
官邸 HP	2011	急性放射線障害死 28 人、小児甲状腺がん死 15 人	WHO、IAEA、国連科学委員会等	首相官邸 (2011)
チェルノブイリ・フォーラム (IAEA 等 6 国際機関)	2005	がん死数 3940 人	対象集団：被災 3ヶ国 (ベラルーシ、ロシア、ウクライナ) のうち被曝量の比較的大きな 60 万人。350 の英語論文	The Chernobyl Forum (2005)
WHO	2006	がん死数 9000 人	対象集団：被災 3ヶ国 740 万人	Cardis et al. (2006)
IARC	2006	がん死数 16000 人	対象集団：欧州全域 5.7 億人	IARC (2006)
キエフ会議報告	2006	がん死数 3～6 万人	全世界	Fairlie and Sumner (2006)
グリーンピース	2006	がん死数 9 万 3080 人 ・うち甲状腺がん 13,700 人 ・その他のがん 71,340 人 ・白血病 8,040 人	全世界	Yablokov, Labunska, and Blokov (2006)
NY 科学学会	2009	心臓病、脳障害、甲状腺がん、白血病、その他がんなど、多様な死因による死亡 98 万 5000 人	5000 以上の論文 (英語、ロシア語含む)、現場調査 1959 年の WHO、IAEA の協定により、WHO は IAEA の許可なしに健康被害に関する調査書を発表できないことを批判	Yablokov, Nesterenko, and Nesterenko (2009)
IPPNW (核戦争防止国際医師会議)・放射線防護学会	2011	・甲状腺がん 10 万人 (ベラルーシ・シゴメリ地域限定) ・乳児死亡 5000 人 ・西欧で 10～20 万件の流産 ・遺伝子障害 3～20.7 万人 ・先天奇形児 1.2～8.3 万人 ・脳腫瘍 188 人 ・1987-92 年で内分泌系疾患 25 倍、神経系 6 倍、循環器系 44 倍、消化器系 60 倍、皮膚 50 倍、筋骨系・精神変調 53 倍 ・がん性でない疾病数多数他	チェルノブイリの惨事によりもたらされた健康被害に関する研究論文 (方法論的に正確であり理解可能な分析を選択)。IAEA、WHO の公式声明は引用元調査の結果、データ改ざんであることを批判	IPPNW (2011)

出典：今中 (2007) に、以下の文献をもとに加筆：首相官邸 (2011)、The Chernobyl Forum (2005)、Fairlie and Sumner (2006)、Yablokov, Labunska, and Blokov (2006)、IARC (2006)、Cardis et al. (2006)、Yablokov, Nesterenko, and Nesterenko (2009)、IPPNW (2011)。